

新潮文庫

木石・悉皆屋康吉

舟橋聖一著



新潮社

木石・悉皆屋康吉

定価は帯またはカバー
に表示してあります。

新潮文庫 草11 A

昭和四十四年十二月十五日 印刷
昭和四十四年十二月二十日 発行

著 者 舟 橋 聖 一

発 行 者 佐 藤 亮 一

発 行 所 株式 新 潮 社

郵便 番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話東京二六〇局一一二(大代)
振替 東京 八〇八番

乱丁、落丁のものは本社又はお買求
めの書店にてお取替えいたします。

印刷・株式会社金羊社 製本・憲専堂製本所

© Seiichi Funahashi 1969 Printed in Japan

新 潮 文 庫

木石・悉皆屋康吉

舟 橋 聖 一 著



新 潮 社 版

1861

目次

木

石

七

悉皆屋康吉

四

解説 河上徹太郎

木石・悉皆屋康吉

木

石

其^{その}

一

二桐^{ふたぎり}医学士は人情に遠い科学者であった。少くとも、今やっている研究が完成するまでは、一切の人間の愛情に溺^{おぼ}れまいと心に決していた。自分の誠実は、ただ、当面の研究題目、サルヴァルサン剤と黴毒^{ばいどく}との関係を、遮^{しやに}二無^{むに}二、究め尽さんとするところにあるばかりだと二桐は、いつも覚悟をきめていた。無論まだ、妻もなければ、子も無かった。新市域のアパートの二階で目をさますと、髭^{ひげ}を剃^そるなり、飯もくわずに、研究所に出かけるのであった。もとは繁華な町のなかにあったH・R細菌学研究所は、このごろ、移転して、青い麦畑を前にした低い丘の上に建っていた。アパートのある所からそこまで、約十分程、環状線を利用するのである。一週のうち月、水、金は、終日、研究室に閉じこもっている。火、木、土の午前中だけ、研究所の附属病室の患者を診察した。そして一週間に二度は宿直をやる。宿直でない日でも、晩^{おそ}くまで、二桐の研究室には電燈が点^ついている。要するに朝から晩まで、顕微鏡とサルモットと、サルヴァルサンとスピロヘーターで、暮らしているのであった。

こういう無味乾燥な学者などというものは、大ていが偏屈者であって、かつ皮肉やである。愛情に騙^{だま}されることを怖^{おそ}れ、愛情の傍^{そば}にある陥穽^{かんせい}について、いつも要心^{ようしん}ばくならざるを得ないのが普通である。サルモットに騙されたためしはないが、人間の善意なんてものには、いかさまが多

いからねと、二桐はよく唇を反らしていうのであった。

然しH・R細菌学研究所にだって、いるものはモルモットと二十日鼠だけでは無い。若い看護婦もいれば、研究員附の女助手もいる。モルモットや二十日鼠に、時間をきめて、小麦や燕麦や小松菜を刻んでくれてやる仕事。これらの小動物の肛門に、検温器を突っこんで、毎日の体温を測る仕事。病毒に感染した小動物の状況観測とその報告。実験用の適不適の鑑定。そういう仕事には、何といっても、女の手を必要とするのである。そこで研究員には一人乃至二人の女助手が各自配属されていた。ただ二桐にいわせれば、この研究所の女ときたら、看護婦でも女助手でも、凡そ女らしいセンスに恵まれているものは一人もないというのである。縹緲の悪いのは止むを得ないとしても、大体、風つきからしてバカついていて世間並に踏める女は、数える程しかないのである。稀に、あくどい化粧をしたり、真赤な口紅を塗ったりしているものもあるが、下手な化粧は、しない方がましである。そんな女を見ると、二桐はすぐ、おや、君は今、モルモットを食べて来たのかい、口のまわりが血だらけじゃないかと、辛らつな皮肉をとばしてやるのがきまりである。

で、どうせ、みっともない女ばかりならと、二桐はすすんで希望して、一番年上の追川初を、自分の女助手に選んでいた。追川初は今年四十四歳の中年の女である。顔は必ずしも醜くはない。却って若い子の下手なメーキャップを見ているよりは、さっぱりして、垢抜けという程ではないにしても、自然なる媚と柔い感覚がある。既に、勤続二十五年というH・R研究所切つての古参で、凡そ研究所内部のことなら、自分のからだのように知悉していた。長く初代所長R博士

の女助手をつとめていたが、R博士の歿後、現所長添沢博士の女助手となつてから、何となく、うまが合わなかったせいか、暫く無任所の位置にあつたのを、三年程前から、二桐が特に所望して自分の傍におくことにしたのである。

追川初の熟練した技術は、特にモルモットや二十日鼠の牝の発情を検索し、これを見わけける鋭敏な目であつた。ひよいとつまんで、その腹をひっくりかえし、チラッと外陰部をにらんだだけで、発情中か否かがわかるのである。そのほかでもモルモットやマウスに関する飼育法の卓越した技能は、追川初の右に出るものはいないので、少し位婆さんでも二桐にとっては、重宝この上もないのである。恐らく他の女助手を使っているのにくらべて、三倍も四倍も、能率がちがうにちがひなかつた。それに、二桐も人情に遠い科学者を以て任じている如く、追川初もまた、人情に遠い木石の女として通っているのであるから、二人の存在は好一對ともいうべきであつた。無論、追川初の木石無情は、彼女の潔癖すぎる性格から出てくるものであつた。彼女は、軽佻を卑しめ、放埒を蔑んだ。彼女の憎しみを買って、研究所を追われた数人の女助手がいる。どんなことがあつても、泪一つ見せたことのない追川初の性格を、みんなは意地悪なものとして、嫌つていた。その代り彼女が侍っている先生に対しての、忠誠は又、類がなかつた。服務規程に対するもつとも厳格な遵奉者でもあつたが、少しも感傷を交えずにやり通す所に、その特徴があつた。二桐はそれを十分に評価していたので、別に研究所内の下らないデマなどは、少しも意に介さぬのである。

この追川初に、一人の妙齡の娘があるという話は、研究所の伝説として古く知られていたが、

少くとも現在の所員で、その娘の存在を確めたことのあるものは誰もなかった。追川初は、この一人娘については、全く口を緘^{かん}っていた。いつしか人々は、口碑としての、想像上の人物としか、考えられぬようになった。それだけに、浪漫的なものを感^{ローマンテシ}じる者もあったが、何しろ追川初を母とするという条件だけで、現実的な興味は消えがちであった。そしてその伝説は、周期的に起り、又、周期的に忘れられた。その追川初が、どういう風の吹き廻しか、或る日、突然、娘を研究所に伴^まって来たのは、ここ数年、その娘のことが、全く人々の想像からさえ除外されていた時であった。況^まして、そういう機微にうとい二桐などは、追川初に若い娘があるということを、その時はじめて知^まったくらいだったのである。

其 二

恰^{ちやうど}度その頃、二桐は黴毒学の研究の傍^{かたわ}ら、サルヴァールサンに対するモルモットの毒力耐性に関する研究にも、手を染めていた。それには、モルモットの一般性状を観測し、その飼育条件を研究し、生殖に関する性状や、疾病^{しつぺい}に関する状況を検^{しら}べ上げることが必要であった。

そういう仕事の助手としては、追川初こそうってつけである。二桐は研究要目の主なる組織を教授した上で、彼女の特^{とく}殊技能に期待して、大体をやらせてみることにした。無表情な追川初^{しん}の顔面にも、その時は久しぶりに赤味^{あかみ}がかった喜色^{うきいろ}が泛^{うか}ぶのを見ることが出来た。

「光栄でございます。まるで、若い娘時分の氣持が味^{あじわ}えるのでございます。若い娘の頃、私^{わが}がは

じめて、こちらに御厄介になった頃、R先生のお指導を受けますたびに、わたくしは、今と同じ、このような気持ちを味ったのでございます。光栄のような、怖いような——女は何と致しましても、気の小さいものでございます。御期待に副いますや否や、ともかく、全力をつくして、御報告を申し上げます」

と、追川初は慰懃な調子でしゃべった。

それから、モルモット小舎の一部に、別にこの研究に必要な大小幾つかの檻が置かれて、そこに交尾の経験なき、何匹かの純粋種のモルモットが飼育せられた。追川初は、いまだかつて見たことのない異常な熱心さで、それをはじめた。各檻には藁の床が敷かれ、モルモットには新しい番号がつけられた。

それから間もない或る日であった。二桐は、廊下でふと、見なれない女とすれちがった。不変、二桐の頭の中は、螺旋状菌のことしかないので、別に向うから歩いてくる女を眼にとめようとしなかったのであるが、然し、向うはチラッと二桐の顔を見た瞬間、きれいな笑顔になって会釈をした。さすがの二桐も、この不思議な程の美しさには、瞬間、おやつと思わざるを得なかった。女は袂が壁にすれすれになる程、端の方を歩いていった。紫矢絢の銘仙を着て、帯も目立たぬような柄のをしめていたが、からだ全体の輪廓に、ごく自然な色気があるというものは、争えぬものである。二桐もぶっきら棒に、返礼した。そしてそのまま背中を向け合して、長い廊下を別れていった。とにかくこの研究所には、全く不釣合な女であるにはちがいない。すると二桐の頭の中にいつのまにか、スピロヘーターが影をかくして、今の女の白い顔が鮮かな印象にのこっ

ているのであった。新しく雇われた女助手かなと考えたが、こういう職業を選んでくる女のセンスとは、どこがちがったものがあった。恐らく今のような女は、この研究所では、むしろ、女らしくあるがために、異端者となるにちがいないのである。女らしさは、ここでは、却って無駄である。或は附属病室の患者附添でもあるかなと思ったが、それならこの廊下を歩いている筈はない。この廊下は伝染性細菌の培養室から、モルモット小舎へ通う一本通路である。もう夕方なので、研究所の内部はひっそりしていた。早じまいに、引上げた研究室には、重い鎧戸が下りていた。附属病室の方も大した重症患者もいないと見えて、落ちついてゐる。ただ、脳脊髄膜炎の研究室が、まだ明るいの、煌々と電氣をつけて、何かやっているのが目についた。

モルモット小舎では、追川初が、例の如くモルモットの肛門に、検温器を突っこんで、体温表をつけている最中であつた。

「三号と二十八号は、肥胖病様症状を呈しております。殊に二十八号の方は、腹部が肥大して体重四十五瓦に達しております。解剖いたしてみましようか？」

そういうときの追川初の目は、若い女のように、キラキラ光っていた。彼女はモルモットの発情を識別することに長じているばかりでなく、これら小動物の内臓を剖検することにも秀でていた。

「実は今、そこで、見なれない女の人とすれ違ったのだが……」

二桐は、発育障害を起して、左右の発毛が不全になっている数匹のモルモットを除外しながらいった。

「おや、もう先生のお目にとまったのでございますか。あれは、私の娘でございます……お断りも致さんで、失礼いたしました。せめてモルモットの体温を測ることだけでも、教えておいてやりたいと、思いましたものですから——」

「モルモットの体温を？」

二桐はそういいかえして、眉をしかめた。若い娘に、させるに事をかいて、モルモットの体温を測らせるとは、何という無慈悲だろうと、その追川初の臆面もない性格が、一寸不愉快であった。

「君にあんな娘さんがあるとは知らなかった。きれいな娘さんだね。モルモットなんか、いじらせるのは気の毒じゃないか」

「でも、私に万一のことがございますと、誰もあれを看てくれる者が居りませんので、何とか一人だけでも食べていけるようにと思って——急に思いついて、つれて参ったのでございます」

「何ていう名だね」

襟子と申しますと、追川初は答えた。襟子、着物の襟でございます。随分妙な名でございました。うう。いいえ、私がつけたのでございせん。先代の所長さま、あのおなつかしいR先生が、追川襟子とつけて下すったのでございます。襟子、襟子ってっておりましますうちに、何でございませう、何ともいえぬ可愛らしい名前になったのでございます、と、しゃべりながらも追川初は注射のためにモルモットの肩の毛をゴリゴリ剃っているのである。そこへ、襟子が、バケツにオカラと小松菜の刻んだのや、人参の細く切ったのを入れてやって来た。

「御挨拶ごあいさつをなさい。こちらが二桐先生。おっ母さんを使って下すっている有りがたい先生です。何分ともよろしく御指導ねがいますように……」

「あら、さっきもう、御挨拶してしまいましたわね」

と、襟子は大胆に二桐の顔を仰ぎ見ながらいうのであった。二桐はその顔を又美しいと思った。

「おっ母さんのお手伝いかね。だがこんな仕事は若い女ひとのする仕事じゃなさそうだね。興味、持てますか」

「もてますわ。でも……」

「でも。何に……」

「でも、退屈しそうですわ」

「はははは。そりゃ、たいくつするにきまっているさ。なにしろ、モルモットの世界で、人間の世界じゃないんだからね」

「人間の世界なんて、もっと退屈じゃないんでございましょうか」

と、追川初よこやうが横槍よこやうを入れた。二桐はふと我れにかえって、口を緘とじた。

其 三

そういう追川初にしても、父のない子の襟子を産んでいるのである。まだ十九の娘時代から、